

## 平成二十七年年度講義録要約版作成にあたり

「さいたま・水とみどりのアカデミー」五年目、無事終了しました。日本の都市が持続可能であるためには、周囲に残された水田や水源地域の森林の存在が不可欠と思ひ、多方面から学んできました。

日本列島はプレートの変動帯にあり、モンスーンアジアに位置し、かつ海に囲まれて温暖多雨。砂山にジウロで水をかけると砂が流れるように、日本の平野は脊梁山脈から河川が土砂を運んで出来ている。それは丘陵を含む山地が国土の四分の三を占めるのに対してわずか四分の一。脊梁山脈の裾野しかない日本の平野。その中で特殊なのが埼玉県。山地が県土の四割弱、平野が六割強もある。

この広い埼玉平野は、荒川・利根川・渡良瀬川、思川、四河川が束になって作ったもの。ただしその内容が問題。河川が作った日本の平野は「洪積台地」と「沖積低地」に分類される。洪積台地は十万年前に出来た土地。沖積低地は、その台地を河川が開削し、出来た深く大きな谷が縄文海進で埋まり、縄文海退で出来た土地。そこは河川氾濫原と呼ばれ、地形区分上最も低く、出来てまだ五、六千年なので地盤は軟弱。その低地が県土の四割。ここに埼玉平野の真実がある。そしてその下流には、江戸・東京が控えている。

この河川が乱流していた不毛の地から洪水を遠ざけ、流路跡を整え「葛西用水」や「見沼代用水」に代表される用水路網を整備したのが江戸時代。近代以降は、その水田の多くをとりあえず可住地にし、とりあえずの都市を構築した。水を入れたバケツに物を入れれば溢れるように、沖積低地というおぼんに都市を構築すれば、水災害リスクが高まる。だから埼玉の河川は、大都市を守り維持するための「都市施設」に変貌した。

今後、少子高齢化が進み、自然災害激化が想定される中、都市周囲の水田を防波堤にし、さらなる都市の拡大は止めないとやっていけなくなる。しかし今、その論理を学ぶ端から水田減少に歯止めがかからず、その進行に拍車がかかっている。現状はもとより次代の担い手が見込めないからだ。経済効率の高い都市が隣接しているのだからやむを得ない。

その対策もいろいろ出ているが、農地は農業生産の場、そこを担うのは農家と限定しているから、農家が出来ないとやっている都市周辺農地では的外れ。だいたい農地が農業の場ではないなら、農業が成り立たなければ農地は消える。その道理を黙認したまま。

課題からの逃避癖は、江戸以来の、とくに埼玉の生き方。江戸・東京の後背地にあつて、奥利根や奥秩父からの洪水を県土に滞水させて江戸・東京を守り、「下らないもの」と言われても地回り野菜や日用品を送って江戸の暮らしを支えてきた埼玉が身に着けた生き方。誇りは江戸の繁栄。江戸も埼玉も武蔵国で一体だったのだから、こういう生き方もある。

でもそのお陰で大都市に接して広い水田地帯が残った。これまでは思考停止で残せたが、今後はそうはいかない。農家が無理な部分は水田の多面的機能を享受する都市住民が担う必要がある。それには都市住民の理解と協力とともに農家の意識改革も必要。そこで大事なことが信頼関係の構築。これは根気と時間がかかる。でも青の洞門ならぬノミ一本でもやる覚悟があれば不可能ではない。その決断をアカデミーでの学習が促してくれた。

遠路、浦和駅前までお越しくくださった先生方、夜間にも拘らず参加してくださった方々に感謝です。また本書作成にあたり、農水省の都市農村共生対流事業で見沼の農家と立ち上げた「見沼田んぼ見山」のステップアップⅡにご支援いただきました。厚く御礼申し上げます。

認定NPO法人水のフォーラム理事長 藤原悌子